

みんなに伝えたい

この実践は、「自分たちが発見したことを“他の学級や異年齢の友達に知らせたい”と始まった、子どもによる手作りのニュース（壁新聞）が継続した取り組みとなり、子どもの発見が園全体で共有された事例」です。「感動をみんなに伝えたい」との強い思いが、子どもにとって「情報を伝える」必要感につながりました。子ども同士のニュースの共有からは、さらなる探究へと体験が広がったことが読み取れます。大人の必要感ではなく、子どもの必要感から生まれ、展開していったプロセスに、「科学する心」の育ちを捉えることができます。

学校法人常磐会学園 認定こども園 常磐会短期大学附属常磐会幼稚園 5歳児

事例 1. 「皆に知らせたい～アゲハチョウの成長～」



皆に伝えたい

- ・ 園庭の草木が育ってきた青葉の頃、生き物が好きで興味をもっている A さんが、**ミカンの木の葉に小さい黄色い卵を見つけた。**
- ・ 仲の良い B さんが、「アゲハチョウの卵だ」と言った。半信半疑の子どもたちは、クラスで育てることにした。
- ・ 子どもたちが、卵を図鑑で調べると、アゲハチョウであった。飼育ケースに入れて毎日毎日見守り、アオムシからサナギに、やがてチョウになった。
- ・ 保育室の外に飼育ケースを置いていたことで、A さんや B さんだけでなく、**他のクラスの子どもにも興味が広がり、たくさん覗きに来た。**子どもたちは、「**園庭で見つけた卵が、見事にアゲハチョウになったこと”自分たちが育てたんだ”**との思いを、幼稚園の皆に知らせたくなった。
- ・ 「今から、幼稚園で生まれたアゲハチョウが飛び出します。皆、2階を見てね」と、自分たちで放送を入れて知らせた。
- ・ 全クラスの子どもたちが、2階に注目したその時、アゲハチョウは飛び立った。そして、追いかけて行った C さんの頭に、そのチョウが留まった。
- ・ 「頭に留まったよ」という皆の声に手を絡ませ、ジツとして動かない C さん。チョウが育ったことや生まれたことを伝える子ども、育てた飼育ケースをしっかりと持っている子ども、頭に留まったチョウと C さんを心配そうに見守る子どもなど、いろいろな姿があった。**「見事、飛び出すまで皆でチョウを育てた！」という気持ちを共有**していた。また、何か凄いことを見つけて、皆に知らせてみたい」などという思いが生まれた。

事例 2. 「カレンダーに出来事をかこう！」



幼稚園ニュースにしよう



幼稚園ニュース 第1だん

- ・ 同じ頃、子どもたちは日々、自分が見つけたドキドキワクワクを皆に伝えたがっていたので、降園前に、クラスでその日にあったことや皆に聞いてほしいことを、自分の言葉で発表する機会を大切にしていた。
- ・ D さんが、カレンダーに出来事を書いておくことを提案したので、翌日、保育者が月日を書いたカレンダーを貼っておいた。すると、その日あった出来事や楽しみな出来事を好きに言葉や絵で描くようになった。
- ・ E さんは、好奇心旺盛な子どもで、毎朝、母親、妹と3人で歩いて登園する際、**園の前の庭に咲く季節ごとのたくさんの花をよく見ていた。5月になりクローバーやシロツメクサがたくさん咲き、E さんは毎朝、四つ葉や五つ葉を手を持って笑顔で登園し、皆に見せてくれた。**
- ・ 園長から、摘んでいいシロツメクサが園周辺にあることを聞いて、E さんは大喜びをした。「自分たちも、見つけたい」と、思っていた子どもたちも喜び、早速、園外の庭に出かけ、シロツメクサや四つ葉、五つ葉をたくさん見つけることができた。
- ・ あまり見つけたことがない、四つ葉、五つ葉まで見つけた喜びから、E さんと F さんが、「このシロツメクサの指輪や冠を皆に見せたいの」「**外に四つ葉のクローバーがたくさんあることを年少さんに教えてあげたい**」と、言った。
- ・ D さんが、「玄関にあるボードに貼っておいたら、皆見るやん」と提案した。すると、登降園時に他学年の保護者もそのお知らせを見てくれている姿がたくさんあり、「嬉しいこと、見つけたもの」を皆に知らせる楽しさと、それらを共感し合う喜びがより増した。その後、『そら組ニュース』が広がり、園全体に伝える『幼稚園ニュース』へと変化していった。

事例 3.「幼稚園ニュースに載せよう！」

- 5月の天気の良い日、Eさんが朝、新しい園舎の池に花が咲いているのを見つけ、担任に、「何の花やるなあ、調べてみる。先生、花の本あったかな？」と、尋ねてきた。丁度その朝の集まりで、副園長が、園庭の池にハスが咲いたことを皆に知らせ、写真を見せてくれていた。
- 自分が見つけた花の名前を調べようとしていたその日に、名前を知ることができた喜びと、副園長と同じことに興味をもち、感動を共有できたことが、Eさんは嬉しかった。「ハスの花が咲いたこと、またニュースにしたい」と言いながら、副園長の所に走って行ってカメラを借りて、二人で一緒にハスの花を撮った。そして、すぐに職員室に行きプリントアウトしてもらった。
- この経験がきっかけとなり、Eさんは、一年間を通して幼稚園ニュースの中心的な存在、『編集長』となった。Eさんは、自分で好きなことがなかなか見つけれず、自信ももてない様子だった。5月と6月は、Eさんの落ち着く場所は、写真を撮ってプリントアウトする職員室。**幼稚園ニュースに載せる出来事を見つけることが目的になった。**「この辺りに貼ったら、みんな見てくれるかな？押さえておくからセロテープ持って来て」「(タイトルは)〇号ではなく、〇だんにしようよ」など、Eさんと友達との関わりや話し合いが生まれた。



発見したことを共有したい

事例 4.「影遊び」

- 秋の誕生会で園長が、絵本「かげはすてきなともだち※」を読んだ。それから、子どもたちは、**影に興味をもつ**ようになった。
Aさん：「見てえ、これキツネや！」
Bさん：「絵本に出てきたツル。作ってみよう」
Cさん：「クチバシ細いよな。フラミンゴみたいな口や」**指や木の枝などの細いものを探し出す。**
- Dさんは、「いいの見つけたよ」と、鉛筆を持ってきて影を作ってみる。子どもたちは、**影をよく見て、「あれ？なんか薄いな、なんか弱いなあ」**など、影の濃さに気がつく。
「あれまた。強くなった」など、影の濃さを強い、弱いで表現する。
子どもたち：「ツルの体作ろうや」
Mさん：「私の影、背が高いね」
- 影が長いことに気がつく。季節や太陽の位置によって、影の長さや濃い・薄いに変化があることに気がつき、さらに興味を広げる機会となった出来事だった。



※「かげはすてきなともだち」
文：中川正文 / 絵：太田大八
出版：福音館書店

【考察】 子どもたちが、様々な気づきや発見を「皆に知らせたい」との思いや、共有する必要感などから生まれた幼稚園ニュースは、出来事の共有とともに、そこから遊びが広がったり、深まったりする契機となった。

保育者自身、改めて気づくことや学びが多く、子どもの遊びを振り返ることにもつながり、自分の保育を見つめ直す機会にもなった。改めて、保育の奥深さ、保育の面白さを感じることができた。

事例 1：アゲハチョウの卵であることが、疑問から確信に変わったことと、チョウを育てあげたことが喜びにつながった。「ドキドキワクワクの気持ち伝えたい」との子どもたちの強い思いを保育者が大切にすることで、発表する姿につながり、共有ができた。

事例 2：気がついたこと、面白いことを描いたり作ったりする楽しさを味わうと同時に、みんなに言葉で伝えたり、ニュースで表現したりした時の友達や保護者などの反応（認める、共感する姿）への心地良さは、有能感にもつながっている。

事例 3：幼稚園ニュースを作ることが自信につながった Eさんは、一つのことに熱中して取り組むようになった。また、友達と関わる必要感が生まれ、話し合ったり、出来事を共有したりするようになった。

事例 4：影の「濃い、薄い」を「強い、弱い」と表現したり、イメージを自分なりに表現したりして、子ども同士では、そのイメージや発見は共有できている様子であった。また、影の長さや短さに気づき、季節によっても、一日の時間によっても変化することを伝え合うことが、実際に試しながら確信していく姿につながった。

